



島の言語の二つの顔

——接触と孤立のはざままで

島の言語は、「孤立」と「接触」という相反する二つの側面を合わせ持っている。それは、島に住む話者は外の世界とのコミュニケーションが断絶されている一方、島民同士のコミュニケーションが活発になっているからである。というよりむしろ、外との話ができないからこそ、島民同士の話す頻度が増えるのである。この二つの要因は、比例的な相関関係にあり、孤立の度合いが低ければ低いほど島内の接触も低い。逆に、孤立が深刻であればあるほど、島民同士の言語接触も重大な意味をもつ。

島言語には相反する二つの面がある。
小笠原諸島と南大東島を例に、
言語接触と言語孤立の実態を探る。

ダニエル・ロンダ

(Daniel Lone)

■島言語は保守的

ここで言っている「言語接触の意味の大きさ」とは、話者同士が互いに影響を与え合うということである。例えば、A島において数百人の島民だけが長年にわたって居住している場合、そしてXさんもYさんもZさんも同じ古い発音を使っている場合、互いにその発音になれているため、それを使い続ける。Yさんの息子がその発音を崩したり違うふうに変えようとしても、その新しい発音はまわりの人にはうつりにくい。むしろYさんの息子に、まわりと同じ保守的な発音を用いるようにプレッシャーがかかる。島社会の言語が古い言

語的特徴をよく残している原因は、ここにあるのである。例えば、琉球諸島には、平安時代の京ことばが保たれていると言われるが、それが事実である側面もある。島社会の言語は、島民同士が日ごろ会って接触を繰り返すことで、島の言語規範が頻繁に再確認され、言語変化の進行を阻むという側面を持っているのである。

■島言語は革新的

しかし一方で、全く正反対の傾向も見られる。すなわち、島社会では、周辺地域とコミュニケーションをとらなければならぬという制約がないため、その言語がとんでもなく変化する方向に変化することもけつして珍しい現象ではない。例えば、ある側面において古い日本語の特徴を保っている与論島方言（など）では、別の面からみると、極めて珍しい独自の言語変化もみせている。この方言では、/k/音が/h/音に変わっており、「毛」が[hɪː]、「皮」が[hɔː]になる。こうした変化を起しているのは、数多くの日本語の方言を見ても、この一帯の島々の方言くらいである（他の地方に見られる例は個別語彙だけである）。陸続きのところであれば、こうした変化が始まったとしても、隣の地域の人とのコミュニケーション

ョンに支障を来たすため、変化に歯止めがかかるのである。しかし、島ではそうした歯止めがかからず、変な発音でも、島民がそれに慣れ、それを容認し、それを採用するようになれば、その発音が定着する可能性は十分あるのである。そして、人口が少ないため、あつという間にその変化が広がってしまうのも、孤島の特徴といえる。

■複数の言語が集合した島社会

ここまでは同一の言語体系を共有する島民の話であるが、同一の島内において、複数の言語を使う人々が集まってくると、状況がさらに複雑化してくる。本稿では、そうした状況が発生した島を、言語孤立と言語接触の観点から、考察していきたい。

小笠原諸島には、数多くの言語社会からやってきた人たちが住み着いて、そこで新たなコミュニケーションを形成した。言語の数は一五を超えていた。インド・ヨーロッパ語族からは、英語、ポルトガル語、ブルトン語、ドイツ語、イタリア語、デンマーク語、スペイン語などが入った。西オーストロネシア語族からは、グアム島のチャモロ語、マダガスカル島のマラガシー語、ブーゲンビル島のブカ語、そして詳細は分から

ないがフィリピンの言語も入ってきた。東オーストロネシア語族からは、ハワイ語、タヒチ語、北マルケザス語、ロトゥマン語、キリバス語、ポナペ語、カロライン語のそれぞれを母語とする人が小笠原に来ていたことが分かっている。現在、これら全ての言語からの単語（借用語）が残っているわけではないので、その直接的影響があるとは言えない。しかし、これらの言語を母語とする人々がかつて島にいて、そして彼らはそれぞれの母語のフィルターを通して英語、および日本語を覚えて、そうした特徴のある英語や日本語を使っていたという意味においてはその存在は重要な事実である。

例えば、小笠原の英語では、*tu* の二種類の発音は標準語のように摩擦音 [θ] と [ð] ではなく、破裂音の [t] と [d] として発音される。その結果、例えば、「三」の three は tree と発音される。右に挙げた英語以外の入植者の言語には θ の発音はないので、この特徴はそれらの言語の影響だと思われる。つまり、島内で昔起きた言語接触のなごりだと言えるのである。

■ 孤立していた小笠原に見られる古い英語

小笠原諸島の言語を考えると、その英語と、日本語

と、そして二つが混ざってできた小笠原混合言語の三つを考へなければならぬ。以下ではこの三つの言語変種のうち、主に最初の二つの具体例を見る。まず、小笠原英語のもつ保守性と革新性の両面を考えよう。小笠原英語では、/v/ が [w] で発音されることがある。これは明治生まれの話者に著しいだけでなく、現在の中年層の人の発音にも聞くことができる。例えば、一九六八年小笠原が米国の統治から日本に返還されたが、これを reversion (標準英語では reversion) と言っている。このほかに、「村」のことを village (標準英語の village) などと言う発音が三〇年前までは残っていた。

なお、小笠原英語の /v/ の発音をよく分析してみると、非常に興味深いことが分かる。それは /v/ の発音がすべて [w] になるのではなく、[v] の発音が現れる場合もあるということだ。しかも、この二つの出現はでたためではなく、きちんと相補分布している。先の単語のように、/v/ が語頭や語中に来る場合は、発音が [w] になるが、語尾（より正確に言えば形態素の最後）に /v/ が来る場合、それが [v] と発音され、have や living, graves などはすべて [v] の発音になる (Long 他 forthcoming)。

この不思議な相補分布パターンは島独自に発生したかとい
うと、そうではなさそうだ。実は、一九世紀初頭まで、イギ
リスの南東部、そしてアメリカのニューイングランド地方に
同じような発音現象が見られた。小笠原にやってきた入植者
の中には、この両方の地域の出身者がいた。しかも、その二
人は島に子孫を残しているし、島社会に多大な影響力を持っ
ていた人物でもある（ロング他 近刊a）。どうも、この二人
が持つていた複雑な発音の使い分けが子孫にも受け継がれた
ようである。

文法面においても、古い英語の動詞の活用形などが比較的
最近まで使われていた。例えば、drag (引きずる) の過去
形に標準語の dragged や drug とは別に古形の drogge が見
られた。

■小笠原英語の独自の発展

一方、小笠原英語独自の要素もある。語彙の例を見ると、
冷蔵庫（標準英語の refrigerator）のことを島では reeler
と呼んでおり、また頭がおかしい人を crack と表現してい
る。前者は元々船の冷蔵庫を表す船乗りの集団語に由来する
が、これを家庭用の冷蔵庫を指す単語として使っているコミ

ュニティは小笠原だけであろう。後者はもしかすると米語の
crack up（精神的にくじける）という動詞と関係している
かもしれないが、少なくとも品詞などの変化が見られるの
で、島独特の言い方と言える。

島社会では、いわゆる民間語源が（人口の少ない、閉じら
れた社会であるがゆえに）広がりやすいのかもしれない。小
笠原でドンガラという単語は、魚を狙って銚しほで突こうとした
ときの「的外れ」という意味で、銃で野生のヤギなどを狙っ
て失敗したときにも使う。語源は不明だが、島人はこれが英
語 don't go in（獲れていない）に由来すると言う。この起
源説の理論的裏づけは難しいが、完全に否定し切ることもま
た難しい。

もう一つ島社会の言語で起りやすいのは、人名など固有
名詞の一般名詞化である。小笠原の場合、動植物の名称に、
セボリヤシやコペカサゴといったものがある。これらはそ
れぞれ一九世紀に島に住んでいたアメリカ出身の人と二〇世
紀初頭にいたキリバス諸島の島民にちなんだ言い方だ。ま
た、「ユーはポンチャンだ」（あなたは馬鹿だ）「ラウカウに
なるよ」（頭がおかしくなる）と言った小笠原特有の表現も
島に住んでいた人の名前を取っているのだ。人名が一般名詞

になる現象は、孤島において頻繁に見られる傾向のようだ(Mühlhäusler 1998)。

小笠原のことばにはこれ以外にも非常に目立つ特徴がある。それは島の動植物の名称に見られる。現在でも、ヌクモメ(シマアジの幼魚)、フヒ(ウツボ)、フンパ(オカヤドカリ)、アラヒ(ノコギリダイ)、タマナ(テリハボク)、ピーデピーデ(ムニンデイゴ)などの呼び名が使われているが、これらはハワイ語やポナペ語など太平洋諸島の言語に由来する(ロング他 近刊b)。小笠原島内では、これらの言語を母語とする人々がいっしょに生活しているうちに、お互いの言語的影響を受けた。

方言接触と小笠原の日本語

さて、小笠原諸島には日本語も当然使われているが、それは必ずしも東京語ではない。明治時代に、最初に入植して来た日本人は八丈島の人々だったため、その言語的影響が今でも大きい。しかし、本州東部の各地や沖縄からの人もいた。小笠原は島だったので、彼らの方言は密接に接触し、コイネ日本語がそこに形成された。コイネとは同じ言語の複数の方言が混ざったときにできる新しい言語体系のことを言う。こ

のコイネの特徴は次のようなものである。

語彙の多くは八丈島方言から取り入れられたが、八丈方言の複雑な動詞、形容詞の活用はなくなり、東京語の文法体系が採用されている。例えば、八丈方言起源の動詞で現在でもごく一般に小笠原ことばで使われているものが数多くあり、ヒッカスル(忘れる)、タラガル(横になる)、ムグル(潜る)、ショギレル(それる)、シカブル(寝小便する)などが聞かれる。しかし、本来の八丈方言では、東京語と異なるこれらの活用形があった。例えば、過去形は「タ」ではなく、「ラ」で表され、「忘れてしまった」は「ヒッカスツテシモララ」になる。小笠原ことばでは、八丈方言の語彙が残っているが、活用などの文法的な要素はそれこそ、ひっかすられたようだ。他にもこうした文法的単純化が見られ、例えば、八丈方言では終止形と連体形が区別されているが、この区別は小笠原ことばでは失われている。

トラッドギルによると、コイネ化には「均一化」(leveling)と「単純化」(simplification)の両方の過程が働いている(Trudgill 1986)。前者は、数々の方言形式の中から、少数派のもの、あるいは有標になっているものが廃れる過程を指す。後者は、不規則な要素が廃れ、規則的なものに移行

していく過程を指す。上の現象はここで言う「単純化」に当たると思われる。

均一化の例として、語彙の場合を見よう。小笠原では衣服のことをキルイと言う。『日本方言大辞典』には載っていないが、室町・江戸時代の文献に出てくる古いことばなので、俚言集に出てこなくても、広い地域にわたって分布していると推測される。伊豆諸島の青ヶ島で使われているようだし、小笠原島民は新潟で生まれ育った自分の母親も使っていると話している。一方、八丈方言では、ヘビラ（衣類）やマダラ（晴れ着）が使われているようだ。これらの単語も明治時代に小笠原に伝わったはずだが、今小笠原でこれらに聞き覚えがあるとと言う人はほとんどいない。断言はできないが、類義語であるこれら三つの単語が小笠原に入ってきたとき、キルイは（八丈島以外でも）多くの地方の出身者に通じたが、他の二つの通用する範囲は八丈出身者に限られていたと推測される。そのため、より広く通じる単語の方が生き延びた、という仮説が立てられる。これは均一化に当たる。

先に、小笠原英語の独特の例を挙げたが、島の英語が島の日本語に影響を与えたこともある。ウエントルやレッコという単語があるが、これらは欧米系島民だけではなく、欧米系

の血を引かない「日系」の島民の間でも一般に使われている。ウエントルは英語の winter turtle が訛った言い方で、冬に見られる小さなアオウミガメのことだ。レッコは「*lecco*（放す）」に由来するが、現在は、釣った稚魚を戻すという場合だけではなく、いらぬものを「捨てる」というときにも普通に使われている。

■南大東島の言語

小笠原と同じように八丈方言の影響を直接受けたのが、南大東島だ。ここは沖縄県に所属する島だが、一九〇〇年までは無人島だった。その年に、玉置半右衛門率いる八丈島の入植者が島の断崖絶壁を這い登って上陸を果たしたのだ。八丈の人がヤシ林を伐採し、砂糖黍畑を作り、製糖事業を起こした。労働力として琉球列島各地から人を募り、それまで外から断絶していたこの孤島は、八丈方言と琉球諸方言との接触が始まった（中井他 2003）。

現在、南大東ではゴミを捨てるときにブツチャルという動詞が使われる。これは八丈系でも琉球系でも子供ならだれでも知っている単語だというのだが、元々は八丈から伝わった言い方だ。一方、琉球のことは（伝統方言ではなく、新しい

地域語であるウチナーヤマトウグチ)も聞くことができる。可能表現には、能力可能の「〜キレル」と状況可能の「〜(ラ)レル」の使い分けが見られる。前者は、「その子はまだ幼稚園生だから泳ぎきれん」、「私はもう年だから、今後、来きれないよ」のように、その動作ができない理由はその人自身にある場合に使われる。後者は、「その服はえさずくて着られんよ」のように、動作ができない理由はその人以外にある場合に使われる。このように、八丈語の語彙―ブツチャルやエズイ(着心地が悪い)―と現代琉球方言の文法が融合して南大東ことばという新しい言語体系が誕生したのである。

■親方言と子方言

小笠原ことばも大東ことばも、八丈語とその他の言語体系が接触することによって形成された新言語である。小笠原は英語やハワイ語、チャモロ語など、西洋と太平洋諸島の複数の言語だ。大東は琉球諸島の複数の言語体系(方言)だ。そういう意味において、二つの島言語を生み出した「親」は複数あったと言える。しかし、それにもかかわらず両方の島が共通の親を持っているのも事実だ。それは、上述の八丈方言

だ。言語系統論で parent language (親言語) という言い方が使われるが、この用語にちなんで小笠原語と大東語をそれぞれ「子方言」と呼び、八丈語を「親方言」と呼ぶことができよう(橋本他 2003)。

なお、「子」はそれを産んだ「親」と似ていないことがある。同じように、同じ「親」から生まれた「子」同士(兄弟方言)が、お互い似ていないこともある。次に、小笠原と南大東のそれぞれのことばが違う方向に発展した具体例を考察したい。

元々八丈方言で、ホゲルは「散らかす」を意味する他動詞で、「掃除に困るからほげるな」といった言い方や「ほげちらす」という複合動詞がある。南大東にも「ほげちらす」という表現があり、ホゲルは他動詞であることが確認できる。一方、小笠原は独自の言語変化を起こしている。ホゲルは自動詞に変わり、他動詞としてホガスが使われている。ホガスが『日本方言大辞典』に載っていないことと、大東島では知られていないことを考え合わせると、小笠原でホゲルが自動詞に変わり、ホガスは類推で新たにできた語形だと推察される。

他にも変化している語がある。八丈方言で、タラガルは座

るという意味で、特に「楽に座る」とか「だらしなく座る」という砕けたイメージがある。大東調査で「地べたにべたと座る」という回答が（複数の島民から）得られて、親方言とほぼ同じ意味だと分かった。一方、小笠原ことばでは、この座る姿勢がさらに一步崩れて「横になる」という意味に変化している。

小笠原で「沈む」を意味するノメルという自動詞がある。南大東では「泥に沈む、沼地で足がずぶっと入る」ことを意味し、「そこはやわらかいからのもるよ」のように使われる。小笠原では、「海で波をかぶる、水中に沈む、海底に沈む」などの場合にも使われる。この違いは、二つの島がおかれている自然環境の違いに起因しているのかもしれない。すなわち、南大東は断崖絶壁で、海まで下りることが非常に困難で、ほとんどの島民は砂糖黍栽培など、海と関係ない方法で生計を立てている。しかも、島が盆地になっており、島の中心は海面より低く、汽水の沼地になっている。小笠原はほぼこの反対の地形で、沼、池など水が溜まるところはほとんどないが、島民のほとんどは毎日海と関係のある生活をしているのだ。

小笠原では、ノメルという他動詞もある。この語形も『日

本方言大辞典』に見られないことから、小笠原で独自にできたものではないかと考えられる。栃木県に「稲がのめる」のように「水中につかる」を意味する語があるが、これは自動詞だ（なお、上のキルイの例で見たように、どの方言辞典でも日本語全域のバリエーションを把握し、網羅することはほとんど有り得ないので、文献に載っていないからといって存在しないとは限らない）。小笠原のノメルはおそらく、「こめる・こもる」のような自動詞・他動詞からの類推でできたものだと思う。

南大東島でマグレルということばは猛烈な痛みを表現するときに使うことばで「ヤメテ（痛くて）ヤメテマグレル」のように用いられる。一方、小笠原では「大笑いをする」という、一見正反対の意味で使われている（ロング他 近刊）。実はこの二つの用法は元々八丈語に起源を持つ。八丈ではマグレルとは「卒倒する、気絶する」という意味だ。痛みの場合によく使われるらしいので、二つの子方言のうち、どちらかと言えば親方言の意味に近いのは大東だと言えそうだが、いずれにしても両方の子方言が親方言から離れて、ある程度孤立しているとこのようにそれぞれ独自の変化を遂げるのは事実だ。

島言語を研究する意義

以上見てきたように、島社会の言語には、接触と孤立という相反する二つの側面がある。しかも外との接触が限られている場合、島内でどんな言語が接触し、影響し合っているか突き止めることができる。そういう意味で、言語変化の様々なメカニズムやその過程を綿密に調べるには、孤島の言語が最適だと言える。数年前にとんでもない実験を提案して、研究助成金を申請した学者がいた。それは無人島を買って、言語の異なる人を数百人募り、そこに送り込んで一緒に生活させるといふ計画だった(あまりにも大胆な計画で実現しなかった)。その人は彼らがコミュニケーションを成し遂げるため、必要に応じて言語を築いていくだろうと考えた。そして、それを研究すれば、言語に関する数多くの謎を解くことができるかと考えたのだ。そういう状況が自然に(しかも研究助成金を使わずに)小笠原ですでに実現していたことを彼は知らなかったのだろう。

【参考文献】

中井精一、ダニエル・ロング、橋本直幸、朝日祥之(2003)「南洋プラ

ンテーション社会における方言接触―南大東島のフィールドワークをもとに」第77回日本方言研究会発表原稿集

橋本直幸、ダニエル・ロング(2003)「親方言と子方言―小笠原諸島と

南大東島における八丈語」第15回変異理論研究会原稿

ロング・ダニエル「編著」(2003)『小笠原学ことばはじめ』南方新社

ロング・ダニエル、稲葉慎「共編」(近刊a)『小笠原ハンドブック』(小

笠原シリーズ2) 南方新社

ロング・ダニエル、橋本直幸「共編」(近刊b)『小笠原ことばしゃべる

辞典』(小笠原シリーズ3) 南方新社

ロング・ダニエル、中井精一、朝日祥之、橋本直幸(近刊c)「沖縄県

に伝承されている八丈語―南大東島生まれの浅沼園さんの中間報告」

『地域言語』15、地域言語研究会

Long, Daniel & Peter Trudgill (forthcoming) "The Last Yankee in the Pacific: Eastern New England Phonology in the Bonin Islands."

Mühlhäusler, Peter (1998) "Some Pacific island utopias and their languages." *Plurilingualism* 15: 27-47.

Trudgill, Peter (1986) *Dialects in Contact*. London: Blackwell.

(東京都立大学人文学部／社会言語学)